

学び合い、高め合い、励まし合い、認め合う教育の追求

全国協同学習研究会会報 2007年度 1号

発行日：2007年6月15日

事務局：



新年度を迎えて

連休も過ぎ、各校実践への取り組みが本格化してきていることと存じます。2007年度も協同学習の実践を広げ深めるための情報を継続的にお届けいたします。

今年度は、アメリカの協同学習研究のリーダー、ジョンソン兄弟の講演が名古屋、東京で数回開催され、日本協同教育学会大会ではシンガポールで活躍するジェイコブス氏の講演も計画されるなど、国際的な動向が直接入ってくる機会が高まる年度となっています。来年度の国際協同教育学会の準備も進められてきています。新しい時代の教育論としての協同学習の意義を、より広い視野で確かめることができそうです。

国内でも、さまざまな教育情報誌に掲載されている現場での実践研究の多くで「学び合い」ということばが頻繁に使われはじめています。「個性＝個人差」というような短絡的な理解により、一人ひとりの違いを強調した個別化教育ではなく、人間としての共通性に根ざした実践の中から個性の育ちを図るという、教育本来の原理に気づく実践が各所で出てきたといえるでしょう。

教育施策が、教えれば子どもが育つ、したがって教える内容を改善すれば教育はよくなる、よくなるのは子どもが怠けているか教師の力が足りないからだといわんばかりの単純で間違っただ素人考えで進められている現在だからこそ、現場には本物の実践をすることが求められているように思います。

学校文化で培われてきた経験を大事にしつつも、協同学習をさらに理論的に学習し、新しい視野を一人ひとりの教師が持つことで、「学び合い」は本当の効果をあらわすと思います。「協同学習を学ぶ」文化が同時に広がって欲しいと願っています。

各校の実践の努力を交流し合うためのご案内も折々にお送りします。学校を越えた協同も効果があるように思います。さまざまな情報などもお寄せください。

また1年間、よろしくお願いいたします。

研究会会長 杉江 修治

英語教育と協同教育

南山大学 瀬戸キャンパス 語学嘱託講師 木村春美

学問的統計データではありません。念のため、日本で英語を教えているネイティブの先生に、「協同学習・協同教育をご存知ですか？」と尋ねれば、かなり高い確率で「はい。」という答えが返ってくるでしょう。他方、日本人で英語を教えている人に同じ質問をすると、多くの場合、戸惑いの表情と短い沈黙が…。そして、「ほら、ペアワークとかグループとか。」と言葉を変えて促すと、「あーあ、はいはい、それね。」と、やっと会話が進みます。そこで三つの疑問です。日本人英語教員に馴染みのないのは、協同学習・協同教育という用語なのでしょうか？ 指導上のテクニックとして定着しているか否かの問題なのでしょうか？ それとも、根本的概念に対する理解が浅い、狭い、あるいは未熟なのでしょうか？

この短い文章の中で、上の疑問に答えらしきものを提示することはわたしにはできそうにありません。そこで、この三つの疑問を頭の片隅に置いていただいた上で、コミュニケーション中心の英語教育という観点から、英語教育の中の協同教育を考えてみたいと思います。文部科学省の指導要綱に Communicative Language Learning が取り入れられて久しいですが、総合的な英語運用能力の向上という意味で、その成果は上がっているのでしょうか？ 中学校・高等学校の英語教育はそれによって改善されたのでしょうか？ 『スーパーハイ』と呼ばれる特定の学校での集中的かつ高度な英語教育の試験的導入・ALT と呼ばれるネイティブの先生方とのチームティーチングの活用・小学校での教科としての英語の試行・全ての教科を英語を使って教えるバイリンガル教育などの取り組みは、日本における英語教育の『質』、あるいは、『本質』を変えていく力を秘めているのでしょうか？

文部科学省の方針がどのようなものであろうと、中学校で英語の授業が一週間に何時間でも、それぞれの高校のカリキュラムがどのように生まれようと、いつでも、どこでも、誰でもできることがひとつあります。日本で英語でのコミュニケーション技術を身につけるとい目標を掲げるなら、どうしても外せない条件と呼んでもいいのかもしれませんが、それは、日本人同士でも、臆することなく英語を使ってみることです。日本語という共通語を持っていて、たいいていの人とのコミュニケーションに困らないという環境にいる私たちです。『恥』の文化と呼ばれる日本文化の特性のためからかどうかは疑問ですが、どうも日本人同士で英語を使うのは恥ずかしいという気持ちが先行してしまいます。けれども、『使う』ことなく上達することなど有り得ないというほかはありません。言語の『道具』としての機能・側面を考えてみれば、これは明らかです。『包丁を使う』のと同じで、『習うより慣れる』とはよく言ったものです。

私の勤務する南山大学瀬戸キャンパスでは、次のような標語を掲げています。『脱・英語のペーパースピーカー』 メッセージは明解です。英語学習は車の運転と同じ。運転の仕方についての本を読んだり、先生から習ったりするだけで、運転の仕方を学んだことにはならないのと同じように、英語の使い方について知識として知っているだけで英語が使えるようにはなりません。英語を使うチャンスを自分から開拓し、自分から積極的にかかわらなければ、どんなに

英語の情報があふれていても、「英語が話せるようになりたい。」という願い・目標は絵に描いた餅です。

では、『教室』という場所で英語を実際に使うことに慣れていくにはどうしたらいいのでしょうか。ここに協同学習・協同教育がもっとも密接にかかわることができる領域があります。日常の授業で、英語を使う課題を協同の枠組みを取り入れ活用していくことです。単純な発話練習の例から、プロジェクトのような応用編まで、具体例を紹介しながら検討していきます。

Read-and-look-up: ロールプレイなどは伝統的に外国語の授業で広く行われていますが、より基礎的な言語活動も学習者間で行うことができます。ペアになってひとりが書かれた文章を目で追い、覚えて顔を上げ、パートナーの目を見てその文章を言います。パートナーはよく聞いていて、今度は自分が手に持っている文章と照らし合わせ、正確に口に出して言えたかどうかを確認します。文章と書きましたが、語や句のレベルで行うこともできます。課題が明解で、手順も簡単ですから、単純なようでオフトaskになることは意外に少ないというのが私の印象です。また、自分が覚えて口に出す、相手の発話を確認するということで、発信・受信という両面から繰り返しが行われるという点でも、語学学習に必須の要素をカバーしています。

Four-three-two: 絵を描写する、教科書のストーリーを要約する、経験を語る、内容は何でもかまいません。同じ内容を三度繰り返して異なるパートナーに語りますが、時間制限があります。一度目は四分で、二度目は三分で、三度目は二分で話さなければなりません。もちろん繰り返す度に語る内容には慣れてくるのですが、時間が短くなるという負荷がかかります。日本の英語教育では、単語の綴りや文法の細かい知識に代表されるような正確さ(accuracy)を磨くことが重視される反面、流暢さ(flucency)を鍛えるという点がおろそかになっていました。細かな間違いに気を取られることなく、情報の要点を相手にわかりやすく伝えるという、まさにコミュニケーションの基本技能の習得を目指す活動により重点をおくべきだという考え方で。もちろん、4-3-2 という時間設定は、学習目標やレベルに合わせて変えるべきものです。

Draw-a-map: 擬似初心者(False Beginner)という言葉をご存知ですか？ 多くの大学一年生や、社会人で英会話学校に通って英語に再挑戦という人たちに代表されるように、英語の知識はあっても運用能力に欠ける学習者のことです。初級の英会話テキストによく見られる地図上での道案内などは、大切な学習項目を含んではいるものの、学習活動としてはあまり面白いものではないかもしれません。先日、NHKの『課外授業ようこそ先輩』という番組(2007年4月14日放送)を見て、これは英語の授業でも使えると思ったものを紹介します。宮崎駿監督の数々の映画で映像ディレクターを務めていらっしゃる鈴木敏夫さんが、母校の後輩に『魔女の宅急便』を使って授業をされました。ディレクターとしての仕事のうちで重要なものひとつに、映画に登場する街や国の地図を描くという作業があるのだそうです。主人公キキが魔法の帚で飛ぶ街を、小学校六年生の後輩たちが、友達と協力して地図に描きます。英語学習の場面で、英語で映画を見てからグループで地図作りの作業をすれば、道案内や位置関係に関わる用語や表現を必ず使うことになります。アニメですから架空の設定であることにおいては英語のテキストと変わりませんが、これはかなり頭を使う作業です。映像からだけでは判断のつか

ないことも多く、お話の流れから想像し、仮説をたて、検証していく作業を含んでいます。それを仲間と交渉(negotiation)しながら行います。また、各グループで微妙に異なる地図ができあがってくるでしょう。そこで、クラスでさらに検討するという活動に発展させることとなります。大人でも楽しみつつ言語活動に参加し、重要表現などを実際に『使いながら』学べます。仲間が使っている言葉や表現を自分でも使ってみればよいのです。テキストで学ぶ言葉が命を授かる瞬間であると同時に、私たちが母国語を学んでいく過程と似ていることにも気づきませんか？ 母国語の場合、周囲の大人の発話こそが子どもにとって学習の源だからです。

さて、第二言語習得の研究では、Communicative Approach の欠陥も指摘されてきています。「はい、どんどん話してみましよう。」というだけでは、言語学習の過程において重要性が指摘されている、新しい言語形式についての気づき(noticing)を促せないというものです。たとえば、前述の架空の街の地図作成という課題なら、道案内や位置関係の表現に欠かせない前置詞や冠詞を含む表現を、学習者が自分の知識の中に正しく取り込み、それを繰り返し使うことで運用能力の一部にできるようにするには、課題を設定するときに学習者の言語能力の把握・明確なプラン・細部に亘る工夫が必要です。言語活動に必要な部品を先に整えておくのか、学習者自身が発見できるような手立てを考えるのか、教師の腕の見せ所です。外国語学習でのグループワークの成功の鍵は、初心者・中級の学習者を対象とする場合は特に、課題の明解で順序立てた設定と言語上の道具の周到な準備が握っていると考えています。もちろん、ご存知のように、予定通りに進むことは有り得ないのですが、...

最後に、具体的な例から英語教育における協同学習・協同教育という本題に戻ります。言語は道具であると同時に、周囲の人たちとの関係作りの基礎でもあります。まさにコミュニケーションです。そこから、人としての成長が生まれます。仲間なくして、他者なくして学べるものではありません。自己の学びが、互いの学びに、互いの学びがみんなの学びにという協同学習・協同教育の大原則が、内在的に存在し、そして自然に生かされるのが、言葉の学びという場だと思えます。ここでは触れることができませんでしたが、外国語の場合、異なる文化や社会で育ち、地域に根ざした未知の言語を学ぶのですから、言語とその根底にある文化を尊重する気持ち、理解したいという熱意と意志がさらに重要であることは言うまでもありません。優れたドライバーは、視界も広く、他の車の動きに常に気を配っています。その技能は身体の動きの一部となっているかのように見え、いとも簡単に行われているようですが、実は、長い、そして時には苦い経験を経て育ったものです。教室の子どもたちが、学習者たちが、路上(世界)で力を発揮できるように、英語学習・英語教育という課題を通じて、共に学んでいきたいと思っています。

全国協同学習研究会大会の予定について

今年度大会は、開催予定校でやむをえない事情が生じ、調整中です。「大会」という形で開催できるかどうか見通しは持っていませんが、少なくとも、実りある実践と研究の交流ができる機会を持ちたいと事務局では考え、努力しています。

「自ら学ぶ力」を育む「学び合いの授業」

犬山市立楽田小学校 有本高尉

「教える授業」から「学び合いの授業」へ

今、教育現場が問われている最も重要な課題は、子どもたちに生涯にわたって生きぬくための「確かな学力」をどう身につけさせていくかということです。

本校では、毎日行われている普通の授業の中で確実な「基礎的な知識」の定着と「自ら学ぶ力」の育成をどの子にも身につけさせたいと考え「学び合いの授業」の教育実践に取り組んできました。「自ら学ぶ力」を育成していくためには、これまでの教え込む授業から脱皮し、子ども主体の授業にしていかなければなりません。また、その授業の成立を可能にする少人数学級などの教育環境の整備が必要であるとともに、教師の力量向上が求められています。市当局の積極的な支援も得て「授業改善」を中心とした教職員の同僚性による教育実践にあたってきました。

少人数による学習は最良の教育環境

子どもと教師がすぐ近くで授業を展開し、「よくわかる授業」につながる少人数の学習は、わたしたちの日常の指導にとって欠かせない最良の学習環境だと考えます。これまでの研究実践で、多くの成果を得てきました。「個に応じたきめ細かい指導ができる」「学習の習得が高まる・・・等」なによりも「学習がよくわかるから楽しい。」と述べる子が増加しました。この学習の楽しさは、子ども本来が持っている「わかった喜び」であり、次の学習への意欲を高め、主体的な学習の基となりました。

教師が本気で教えている生の気持ち伝わり、信頼感がますます深まります。授業へ臨む態度がよくなり、他事などなくなります。実に、参加度が高い授業となり、子ども自身の集中力も養われています。

学びの授業で育む「自ら学ぶ力」

この、信頼関係を基盤とした参加度の高い「学びの授業」で、基礎的知識や技能はほぼ確実に習得します。また、同時に、友だちと学習する中で「人としての基」となる励まし合い、助け合い、友だちとの関わり方、心の豊かさ等を同時に学習していると考えます。勿論、教師の適切な支援が必要となりますが、育てたい「自ら学ぶ力」を毎日の、日常的な授業の中で培っているのだと確認したい。わたしは、「自ら学ぶ力」の基として、友だちや仲間と共に学習するこの「共に学ぶ喜び」が大きく関わっていると感じてきました。

次に、学び合いの学習を行うための学級集団づくりも重視してきました。少人数授業で学級を二分する場合、最初から習熟度等の能力別の編制にはしません。分割は原則として集団間等質、集団内異質としています。

基本的には、「異質な集団の中でこそ 子どもは学び合い、成長する」のだと思います。友だちと共に学習する喜び、教えてもらい分かった喜び、教えた喜びなどが、効果が大きいのだと

考えます。また、この学習から「学ぶ意欲の回復や人間的な成長」を目指していけるものと確信しています。

少人数授業の実際 算数科指導を通して

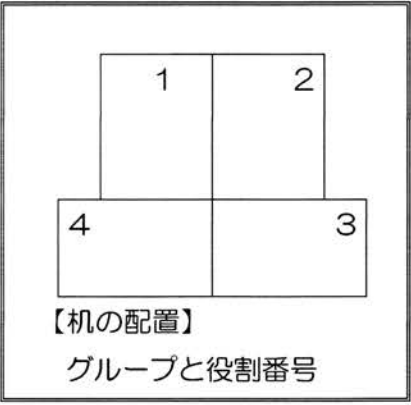
- ・ 1年から5年までの各学年では算数の少人数授業を実施している。
- ・ 各学年の指導を積み重ね、系統的に学校全体として子どもを育てていく。

本校が少人数授業に取り組んだ当初は、学習中につまづく子が増加する中学年の算数の授業をまず少人数の学習ができるようにしたいと考え、3、4年の授業で学級を二分し少人数の授業を試みました。確かに効果がありました。そこで、さらに学年を広げて、3年前より、市に4人の非常勤講師の配置を依頼し、ほぼ全学年の算数科で少人数授業を実施出来るようになりました。昨年度は、4人の少人数担当講師を1～4年の各学年に配置しました。県費の講師を5年に配置し少人数の授業を行うこととしました。初めて講師となった2人も含め教材理解、教材開発、学び合いの工夫等算数の授業は非常勤講師が中核となり、全員がよく努力し頑張ってくれました。

教師間の研究実践により「学び合いのルール」や「あゆみカード」は学年の発達段階に応じて作成され、毎年改善されています。また、発達段階に応じた指導方法も工夫されてきました。わたしは、校内の子どもの学習活動を観察して、教師と子どもの信頼が深まると共に、どの子にも確実に学力がついてきていると感じています。

指導方法の工夫・改善 (学び合い学習例)

授業改善を目指した「授業づくり」の中でグループでの話し合い活動を大切にし、どの子ども主体的に取り組むために活動の工夫を行ってきました。算数の少人数授業では、常に4人を基本としたグループで学習を進め、学級の生活班と学習班を同じメンバーとしています。教室では相互に学びやすい机の配置をとり、互いの作業や結果が直接確認し易いようにしました。これは、他の友だちへの関心・配慮となり学習の理解を深める助けになりました。また、4人には学習過程の中で様々な役割を与え、順番で役割を交代しています。時には司会者であったり、ホワイトボードへの書き込み係であったり、発表者であったり様々な役割分担をしてきました。また、同時に4段階の学習活動を工夫して課題解決にあたれるようにもしてきました。



勿論、学び合いはグループ活動だけではありません。学

級全体での学び合いも行います。また、算数科での経験を他教科にも大いに活用しています。

学習意欲を高める「あゆみカード」の活用 (原稿未資料に具体例掲載)

「あゆみカード」は、「自ら学ぶ力」の育成に欠かせないものです。

このカードは、「学習の見通しを持つこと」「『分かったこと』を記録すること」「学習状況を保護者に伝えること」などを目的としています。

毎時間の学習で「わかったこと」を自己評価し記録するカードです。課題を明確にしたり、

励ましの言葉を記入したりします。子どもも教師も、どこまで理解しているかがはっきりしません。毎時間点検するこの積み重ねが重要で、少人数の学習だからこそ可能とも言えます。わからないことがわかる。疑問を解消する。「わかったこと」から素直に喜びが生まれ探求への新たな意欲が生まれます。子どもにとっても、ここが学習の出発点になっていくのだと再度確認したい。ここで、少人数の授業を実践してきた教師が子どもの変容をこのようにつかんできました。

教師がつかんだ子どもの学習実態

- ・ 確実に「確かな学力」がついた。
- ・ 距離が近くなり、安心して分からない事をきける。
- ・ 友だちと学習する楽しさを味わう。
- ・ 友だちや教師の励まして「わたしも頑張ればできるぞ」という学習意欲が高まった子が出てきている。
- ・ 生活を向上させていこうとする活動につながる。

まさに、わたしたちが育てたい「自ら学ぶ力」への基です。毎日の授業の積み重ねによる成果と確認したい。そして、この成果の基盤となったのは、「第一に、人数の少ない少人数の学習であったこと。」「第二に、学年に配置された講師が、算数科の授業では学年の中心となり教材教具や学習プリントを用意し、学習内容の打ち合わせを実施できたこと」「第三に、学年教師の継続的な努力により毎時間の『あゆみカード』の点検ができたこと」などがあげられます。また、市教育委員会の非常勤講師の派遣等の財政支出を伴う強力な支援のたまものです。

今後の課題

「少人数授業」と「教師の努力と創意工夫」が加わって望ましい子どもの育成へとつながることを実感してきました。今後も、毎日の授業を充実するような対応が必要となります。教育現場が主体となり、自ら授業改善への努力を継続していくために、教育行政の積極的な支援が必要といえるでしょう。義務教育として、毎日の普通の授業で「自ら学ぶ力」を育成したいと考えます。

- ① 教育環境の整備 少人数の学習は、欠かせない最良の教育環境です。常勤講師の配置も含め、継続的な講師の派遣が必要です。
- ② 教師の多忙化解消 教育現場で時間を生み出す工夫。自分たちで忙しくしていることはないか？「学びの授業」へ向け再度学校の教育活動を点検する。
- ③ 指導方法のさらなる工夫・改善への努力 系統性を重視し全体指導の計画を作成する事を含め教師の力量向上が求められる。

「ここがわからん。」「どういう意味だ？」素直で素朴な子どものつぶやきが聞こえてきます。そして、その子のすぐ近くに「これはね。こういうことだよ。」とつぶやきに確実に答える友だちや教師がいます。こんな学習場面を日常的にどの教室からもたくさんみられるようにしたいと考えています。わからないことが、率直にわからないと言える授業場面が大切です。

⑧ 割合

5年()組 ()番 名前()

割合の達人になろう!

【今日の勉強は?】
 自分でできた → A
 友だちに教えてもらってできた → B
 自しんがなくて不安だ。 → C

【今日の勉強は?】
 ~授業参加直線~
 ・話を聞く ・発表する ・グループ活動
 自分はどれだけできたかな? ☆

時間 目日	ページ	今日のため	今日の勉強は?	一言感想
①	P.39 P.40	・割合をおぼえ、求めることができるようになろう。 ㊦ 花子さんは20さつ、太郎君は32さつ読みました。花子さんの読んだ本の数を1とすると、太郎君のよんだ本の数の割合を求めましょう。 (式) (答え)	☆ -----	
②	P.41	・全体と部分の割合を求めることができるようになろう。 ㊦ トマト400gとレタス240gを使って、野菜サラダを作ります。レタスの量はトマトの何倍でしょう。 (式) (答え)	☆ -----	
③	P.42	・くらべる量を求めることができるようになろう。 ㊦ 全校で650人います。5年生の人数は学校全体の0.2倍だそうです。5年生の人数は何人でしょう。 (式) (答え)	☆ -----	
④	P.43	・もとにする量を求めることができるようになろう。 ㊦ サッカークラブの希望者は42人で、これは定員の1.4倍にあたります。サッカークラブの定員は何人でしょう。 (式) (答え)	☆ -----	
⑤	P.44	・百分率と小数の関係をおぼえよう。 ㊦ 百分率を小数に、小数を百分率で表しましょう。 $0.8 = [\quad]$ $7\% = [\quad]$	☆ -----	
⑥	P.45	・百分率を使った問題が解けるようになろう。 ㊦ 5年生は、男子が84人で、女子が75人です。男子の人数は、女子の人数の何%ですか。 (式) (答え)	☆ -----	
⑦	P.46	・割合の問題をたくさん解こう。	☆ -----	

⑧	P.47 ◇ 練習 ◇ 副 ・学習のまとめをしよう。			☆	
かくにんテスト		/ 10	たいへんよくできた	よくできた	がんばろう
⑨	P.48 P.49 ・帯グラフと円グラフをよみとることができるようになろう。			☆	
⑩	P.50 P.51 ・帯グラフと円グラフがかけられるようになろう。			☆	
⑪	P.52 ・文章問題を解いて、説明ができるようになろう。			☆	
⑫	P.53 ・文章問題を解いて、説明ができるようになろう。			☆	
⑬	◇ たしかめ道場 ◇ P.54 ・学習のまとめをしよう。			☆	
かくにんテスト		/ 10	たいへんよくできた	よくできた	がんばろう
⑭	・割合の問題にチャレンジし、割合マスターになろう！			☆	
⑮	まとめのテスト		よくできた	できた	がんばろう

◆ 「割合」を勉強して思ったことをかきましょう。

★ 先生から

★ おうちの人から

基礎基本の徹底と協同学習

中京大学 杉江修治

基礎基本の習得の徹底を図るためには個別に取り組みさせるドリルの頻度を増せばよいという知見はあながちまちがいではないだろう。基礎基本の学習内容の習得の度合いは時間との関数であろうから。

ただ、そのような学習で大切なのは、その背景にあるモチベーションである。競争による学びでは、所詮目標は他人に勝つことに置かれ、学習それ自体には置かれない。そこでは学ぶこと自体はある意味「他人事」である。日本の学校学習への批判の一つに「学力の剥落の著しさ」があげられているが、競争による動機づけを背景とした教育が蔓延しているところにその主要な原因があるように思われる。「習得」を「定着」に結び付けなくては行けない。

基礎基本の習得・定着についても、協同原理を基礎に置くことの重要性を、ここでは2点にわたって考えてみたい。

まず、個別のドリルを実施する場合を想定しての協同の重要性である。

私は、各所で、協同による個別学習という、一見矛盾した話を繰り返してきている。基礎的な練習、その内容は計算であったり漢字であったり、英語の単語であったりするのだが、それを朝の会や授業のはじめの5分間程度を費やして行うという実践を結構見受ける。私は繰り返しの学習機会を設定するという点でその試みはいいことだと思う。しかし、当然のことながら、毎回の成績には必ず個人差が出る。そのとき、学習の遅れている子ども、習得の不十分な子どもに、仲間がどのような態度を持つかが重要ではないかと思う。

「あいつはいつもできないバカなやつだ」とか「あいつのおかげで待たされる」というように仲間が思うのか、それとも遅進児のいつもの成績を仲間が承知しており、今度はどれくらい彼(彼女)が進歩した結果を出すかを固唾を呑んで待っているのか、そして心のうちで「頑張れ、頑張れ」と応援しているのかでは、遅進児の進歩は大きく違ってくるはずである。進歩の幅が小さいことを仲間からバカにされるのではなく、努力して得た小さな成長を仲間が祝福してくれる、そういった共に育とうという協同的事態が教室の中で一貫することで、基礎基本の習得は高まるだろう。また、単なる出来、不出来ばかりでなく、努力する姿の大事さを分かり合う経験を通して、習得の早い子どもたちも、学びは「我が事」だという学習態度を形成していこう。

次は、基礎基本の事項の直接的な学習ではなく、普段の学習過程とのかかわりである。

私が1980年頃参加した実践校で、地域での偏差値最底辺といわれる高校があった。ここでは高校生でありながら九九を唱えられない生徒、アルファベットをAからZまで書けない生徒が普通にいた。アルファベットを覚える中学生頃にはすでに学習意欲が眠らされており、実際に習得しなかった可能性があるが、少なくとも九九は、小学校2年生のとき

に、ほぼ 100%の子どもが完全習得を果たしているはずである。高校生でそれが唱えられないのは覚えていないからではなく、忘れたのである。

われわれが九九や文字を忘れそうもないほど頭の中にしっかり定着させているのは、直接にそれを学んだ後に、頻繁に学校や生活でそれを使っているからである。心理学用語で言うならば、繰り返し繰り返しオーバーライニング（過剰学習）をしてきたからである。とりわけ授業はそのようなオーバーライニングの機会にあふれている。すなわち、基礎基本は、授業で、自ら進んで使うことによって定着するのである。

私が出会った、九九を忘れた高校生は、おそらく小学校高学年あたりから学習につまずき、競争に敗れ、自ら学ぶ機会を避けた結果であろう。教師も「落ちこぼれた」子どもに質問するのはかわいそうだという哀れみの気持ちで、彼（彼女）を授業に参加するように誘うことをしなくなる。中学校の授業では、机間巡視で、遅進の生徒の近くはよけて通る教師を見ることは珍しくない。その生徒は、折角かつて獲得した基礎基本の力を発揮しないですんでしまう。基礎基本が生きるという経験も持たずにしまうことになる。

分かって、知ろう、考えようという努力を評価してくれる仲間がおり、積極的に支援してくれる仲間がいるモチベーションの高まりを誘う協同学習のもとでならば、学びは我が事となり、自ら学びに向かう学習態度が形づくられる。基礎基本の学習内容を自ら活用しようとすることで、益々の定着が図られるはずである。

基礎基本の習得と定着を図る実践が、その定着の先、すなわち習得・定着したことから主体的に活用しようとする態度の育成までも見通して進められるよう期待したい。そのような実践の基盤には協同学習の考えが不可欠であると思うのである。

日本協同教育学会（JASCE）第4回大会案内

時期：2007年8月4日（土）5日（日）

場所：常葉学園大学（静岡）

プログラムなどは日本協同教育学会（<http://jasce.jp/>）、協同教育ネットワーク（<http://www.kyoudo-edunet.jp/>）のHPに近くUPされる予定です。ご覧ください。問い合わせは XXXXXXXXXX まで。

全国個集研岡山大会

2007年度大会は2007年11月23、24日に愛媛県で開催されます。

詳しくは個集研 HP（<http://ww6.enjoy.ne.jp/~juntendo4649/>）をチェックしてください。

協同学習研究者ジョンソン兄弟の来日講演

1 中京大学での講演

講師 ロジャー・T・ジョンソン氏（ミネソタ大学教授）

通訳付

演題 学生参加型の大学授業の方法

日程 2007年9月12日（水） 午後3時～4時半

会場 中京大学八事学舎 センタービル8階 0801号室（無料）

お問い合わせは中京大学教養部 杉江修治まで（sugie-sh@cac-net.ne.jp）

2 南山大学での講演

講師 デービッド・W・ジョンソン氏（ミネソタ大学教授）

通訳付

演題 グループダイナミックス研究の実践的展開—人間関係を基盤とした自己実現を
目ざして

日程 2007年9月12日（水） 午後6時～8時

会場 南山大学D棟（無料）

南山大学 HP に詳しい案内があります（<http://www.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/koen/index.html>）

事務局からのお願い

新しい年度に入りました。会員の方々には会費納入よろしくお願い致します。

1年分2000円です。昨年度未納の方は4000円の納入をお願いいたします。

郵便振替 口座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589

口座名称：全国協同学習研究会

事務局からさらにひとつ：e-mail アドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内を e-mail で送ってもかまわないという会員の方々は、空メールで結構ですので事務局宛 XXXXXXXXXX アドレスをお教えてください。経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。

学び合い、高め合い、励まし合い、認め合う教育の追求

全国協同学習研究会会報 2007年度 2号

発行日：2007年9月25日

事務局：

暑い夏を越えて熱い実践へ

酷暑を何とか乗り越えて、秋の実践に入ります。

参議院選の自民党敗退と安倍総理退陣のサプライズ後でも、政治家たちの「教育いじり」は収まらない様子です。学習指導要領の改訂論議もしばしば報道されていますが、教育政策の一貫性のなさ、いかに場当たりの、思いつきのそれが進められていることか、教育は百年の計ということばはどこに行ってしまったのでしょうか。

政治家や、彼らを取り巻く周辺の人々の学力理解は、驚くほど次元が低いように感じます。結局は知識の量が学力だと考えているとしか思えません。したがって、学習時間の増加が対応策として単純にできてしまいます。

ゆとり教育が議論され始めた最初の頃には、真剣で、結構まともな学力論議が交わされていたように思います。それは人の生き方、社会のあり方まで含む、複雑な中身を持たざるを得ません。そういった難しい議論に耐えられないおとなたちが教育を動かそうとしているのですから始末が悪いのです。

個の完成という教育の目標は、同時に、社会と結び合い、社会を担う、主体的で連帯的な人格の育成を視野に入れていなくてはなりません。いまや、そういう見解は、現場を預かる一人ひとりの教師のところでは期待できないように思われるのです。

学校は、与えられた行政の条件を受け入れざるを得ないところではあるのですが、それを子どものよりよい成長をめざすという観点で捉え返し、一人ひとりの子どもの成長と、より良い社会づくりに向けた実践化を図っていくことは、難しさもありながら、全く不可能ではないと思います。協同学習を実践の根底に置いた授業改善、学校改革の意欲が全国的に高まってきているのは、そのことの表れだと感じます。

暑い夏を乗り越えたところで、子どもたちに向けた熱い実践を作りあげたいものだと思います。

研究会会長 杉江 修治

「協同」する心を育む“本物の人材の森”づくりを！

石川県小松市立芦城小学校 高島 雅展

「木を植えるということは、いのちの木を植えること」と主張するのは、この度“ブループラネット賞”を受賞された宮脇昭氏。氏は3,000万本の植樹、“日本一木を植えた男”として防災・環境保全の活動に世界を股にかける。その氏の著作『いのちの森を生む』（NHK出版）は、私にとって教育の世界にも通ずる“自然界の法則”を見る思いがして、たいへん興味深い一書となりました。

植栽計画にあたっては、目的を明確にすることと、規模の大小を議論するよりも、まずできるところから植えていくこと。また、樹種の選定にあたっては、古くからある鎮守の森や斜面林、屋敷林などに出向き、それぞれの地域の土地本来の樹種（潜在自然植生）を見極めること、今植えられている樹木は、できるだけ排除しないことと述べられています。

さらに、自然の森の掟にしたがって、1平方メートルに3本くらい、根群が十分に発達している幼苗を混植・密植すること、そして、植物集団は、互いに競り合いながら少し我慢し合って密度効果で生育し、4、5年経てば木の特性に応じて成長し、高木、亜高木、低木のシステムできると語っています。

氏が願う、自分たちの明日のいのちを守る、防災・環境保全、水源涵養として機能する“本物の森”づくり。教育の世界にあっては、教育基本法の改正を初めとする一連の教育改革が、未来世紀を担う子どもたちにとって「生きる力」を涵養する“本物の教育の森”づくりとなり、大きな成果を生むことを切に願うものです。

さて、私事で恐縮ですが、今春赴任した学校は、寛政6（1794）年に武士と町衆が郷校として創設した「集義堂」をルーツに持つ、214年という長い歴史を有する伝統校。私の仕事の第一歩は、まず、学校が今日までにどんな歴史を歩んできたのかを繙くところから始まりました。幸い、今日まで本校の教育を支えてきた先人の偉業が数々の文献に記され、小松市の教育を語る上でも欠かせない貴重な文化遺産として継承されてきています。

わくわくしながら文献を繙いているうちに、私は思いもかけない不思議な発見をしました。それは、「宇宙のすばらしい地球人になろう」と書かれた色紙を職員室前の表彰棚の中に見つけたことから始まります。今から14年前、本校の創立二百周年記念式典の折、来校され記念講演をされた宇宙飛行士・毛利衛氏が、小松市の子ども達にと贈った直筆のメッセージ。それ以来、校門を入った右手にある石碑に刻まれた“15文字のメッセージ”が、元気に登下校する本校の子ども達の姿を見つめてきました。

一方、二百周年という時を同じくして特集記事として組まれた北國新聞の『教えの園ありて』には、谷了然（1848～1919）氏が、本校の同窓会に招かれて講演した時の言葉が掲載されていました。そこには、ソクラテスの言葉を引用して「飲食に終始する舌三寸程度

の人」「わが身のことだけを考える六尺の人物」、そして「高い志を持った宇宙の公民」と3種類の間人像が語られており、毛利氏のメッセージと不思議にも重なって、私は、時代を超えて相通する“不易の宝物”を見つけたような感慨に捕らわれました。

これまで本校の歴史の底流に流れてきた二つのメッセージが一所で出会い、共通する一つの言葉に…。こうして、今後の教育目標を定める上で私は、何のためらいもなく「地球の未来を拓く芦城っ子の育成 ～宇宙のすばらしい地球人になろう～」と決め、新たなスタート地点に立つことができました。

ところで、本校の学校研究を振り返ってみた時、平成の初めより体力づくりや健康教育を中心に「ねばり強くがんばる子の育成」をめざしての研究実践がなされ、やがて、「子どもの学ぶ力を高める教育活動」や「生きる力を育む教育活動」を求めての研究実践へと引き継がれてきました。さらに近年は、文部科学省より「学力向上フロンティア事業」の指定を受けて、算数科における少人数授業の研究や特別支援教育のあり方を追究する実践へと移行し、社会の変化や時代のニーズに応じた研究へと変化してきています。

こうした研究の大きな流れの中で、今年度は、いよいよ本校の新校舎建設というハード面の改革が始まります。急速に進む国の教育改革の動向を睨みながら、本校のこれまでの教育課程を新たな視点で見直し、ソフト面での同時改革も強く求められています。

一方、「集義堂」に始まる本校の歴史と伝統に思いをはせる時、いかなる時代になろうとも、児童に“集義の心”（正しい行い、正義の心を積み重ねて心の修練された人に）を育むことが肝要と私は考えています。少子化の進展に伴い、児童を取り巻く環境は、大きく変化しています。人間形成の土台を築く児童期。発達課題を明確にしながら一人一人の児童に、心身共に明るくのびのびと生活できる“子ども時代”を保障し、“知・徳・体”のバランスの取れた教育課程の構築を真剣に追究する時であると思います。

ボーダレスな地球環境は、“距離感”の掴みにくい時代でもあります。未来世紀に生きる児童が、“集義の心”を核としながら豊かな人間関係を築き、地球的な問題群を切り拓く「宇宙のすばらしい地球人」になってほしいと心から祈っています。

ともあれ、子どもたちにとって学校で過ごす大半の時間は、「毎日の授業」です。その1時間、1時間の積み重ねの中に1年間があり、6年間の成長過程があります。協同学習が目指す「民主・共生社会の基盤となる価値観」の醸成も、日々の地道な教育活動を通した教師の意図的・計画的なしかけがあってこそ盤石なものとなります。学級や学年、さらには全校という集団の中で、ある時は2人がペアになり、また、ある時には4人がグループで関わりながら、子どもたちがそれぞれの役割を担い責任を果たして、ぜひとも「自他共栄のこころ」を育ててほしいと願っています。

そこで、本校でも、今年度より足下の課題を見据えながら、新校舎建設の槌音と共に5カ年計画で「グランドデザイン 芦城小 2007」を描き、下記の4つのプロジェクト

- ①豊かな“ことば”を育むプロジェクト
- ②“協同”する心を育むプロジェクト
- ③“郷土”を知り、文化をつなぐプロジェクト
- ④“特別支援教育”推進プロジェクト

を立ち上げて、「新たな教育課程の創造」に向かったの取り組みを開始しました。「協同学習」の理念が、“先見性”と“進取の気性”に満ちた歴史と伝統のある本校の教育風土となってしっかりと根を張り、大樹となって育ちゆくことを祈って、“本物の人材の森”づくりに日々邁進して参りたいと思います。

2007 年度 秋の各地の実践研究大会

石川県能美市立根上中学校

読解力を育む指導の研究—学び合える生徒の育成を通して

2007年10月19日(金)

愛知県犬山市立東小学校

自らの食を考え、主体的に学び、実践する子—「食育カリキュラム」の開発を通して

2007年11月7日(水)

三重県名張市立桔梗ヶ丘東小学校

共に学び合う授業の創造—聴き合い 学び合う授業を つながり合う喜びを

2007年11月15日(木)

鳥取県米子市立加茂中学校

未来につながる確かな学力と豊かな人間性の育成—生徒自らが主体的に活動し、思いを語り、受け入れられる集団づくり

2007年11月22日(木)

事務局からお願い：e-mail アドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内を e-mail で送ってもかまわないという会員の方々は、空メールで結構ですので事務局宛 (), アドレスをお教えてください。経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。

泳げない子

島根大学教育学部初等教育開発講座 高旗 浩志

児童数 1,200 名を越えるマンモス校でのお話です。その小学校にはプールが2つありました。ひとつは低学年用の小プール。もうひとつは3年生以上のための大プールです。

低学年の子どもは、みな一様に赤いメッシュのスイミングキャップを被っています。それが3年生になると、白いメッシュのキャップになるのです。しかし、それを被ることができるのは、プールの横幅 10m を泳げる子どもだけでした。

ほとんどの子どもたちは、3年生のうちに白いキャップに変わります。しかし、ごく少数、ほとんど泳げない子どもがいて、その子はいつまでも赤いキャップを被っていなければなりません。H君は、そんな子どものひとりでした。成績は良く、学級委員も務め、またリレーの選手に選ばれるほどかけっこも速いのですが、水泳はからっきしダメでした。

ひとり、またひとりと、赤いキャップが白いキャップに変わって行きます。また、白いキャップの子どものなかにも、25m、50m、75m、100m と泳げる距離が伸びるたび、その白いキャップに赤いラインが一本ずつ増えて行きます。25mごとに赤い組紐がもらえて、それをキャップに縫いつけるのです。

そんな友達を横目に見ながら、H君はどこまでもみじめでした。天気の良い日ならまだしも、曇天の日の水泳は、できれば逃げ出したくなるほどでした。時折、担任の先生が手を引いて泳ぎを教えてくれることもありましたが、それはまるで、よちよち歩きの子どもが親に手を取ってもらおうような姿に思えて、H君のプライドを大いに傷つけていたのでした。

5年生になって、H君は白いキャップを被ることを許されましたが、それは 10m を泳げたからではありません。担任の先生の配慮によるものですが、泳げないことをいちばん良く判っているのは、ほかならぬH君自身です。キャップは白くなりましたが、赤いラインが入るはずもなく、そうして彼はとうとう泳げないまま小学校を卒業したのでした。

中学校に入っても、水泳の授業は悪夢のように追いかけてきます。そのいっぽうで思春期なりの悪知恵も働くようになり、嘘について見学をしたり、保健室で寝ていたりすることもありました。しかし、そんな手が幾度も使えるはずがありません。仕方なくプールに入るのですが、好きな女の子の前で恥をさらすのは耐えがたいものがあります。どうすれば目立ずにすませられるか、「サボリ」と思われない程度にプールサイドに居続けるにはどうすればよいか、そのことばかりに腐心していたと言います。ですから、ひとりずつ順番に泳がされるとときも、次から

次へと順番を譲り、ひたすら時間切れになるのを待っているのです。

そんなH君を見るにみかねたのでしょう。体育担当のS先生が、他の同級生に向かって、「とにかくこいつを泳げるようにしろ」と言ったのです。指名されたD君、K君、そしてT君はいずれも運動神経抜群です。なかでもD君は、県大会の平泳ぎで常に上位を争う選手でした。それからのH君の水泳の時間は、この3人による特訓となったのです。

泳げない者の相手をさせられた3人ですが、彼らはいずれも一生懸命にH君を教えました。決して嗤ったりバカにしたりしませんでした。H君の泳ぎのどこがどのようにいけないのか、彼らなりに一生懸命に教えました。身体を支えるのはT君、手の動きはD君、足を見るのはK君の役割でした。

そうして一生懸命に教えてくれる3人に、H君は「悪いな....」と思いました。きっと、自分たちが泳ぐことだけをしたいだろうに、と思ったからです。しかしまた、嬉しくも思っていました。無様な姿に変わりはありませんし、周りの友達に嗤われているかもしれないけれど、すこしでも泳げるようになったほうが良い。そしてこの3人の期待に応えられたら自分も嬉しい。そうして気持ちはすっかり前向きになっていたのです。

そうしてその夏の終わり、隣のレーンを泳ぐ平泳ぎの女の子に追い抜かれるほどのクロールでしたが、H君は100mを泳げるようになったのです。そのとき喜んでくれた友達のことを、彼はいまでも忘れないと言います。

そうしてH君は言葉を続けました。小学校と中学校の時、自分にとって耐え難かったのは、水泳の時間だけで良かった。水泳の時間さえ我慢すれば、学校はとても居心地の良いところだった。だけど、同じ時間を過ごした友達のなかには、自分が水泳の時間に感じていたような耐え難い思いを、毎日、授業のなかで抱えていた子が居たのではなかったか。そうして、D君、K君、T君が自分に接してくれたのと同じように、自分は他の子に接していただろうか。そのことを考えると、恐ろしくなって仕方がない、と。

そのH君が、いまでもここで何をしているかということ、ここでこの文章を書いているわけです。私が「協同」にこだわらざるを得ない原風景が、ここにあるのです。

事務局からのお願い

会員の方々には会費納入よろしく申し上げます。

1年分2000円です。昨年度未納の方は4000円の納入をお願いいたします。

郵便振替 口座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589

口座名称：全国協同学習研究会

日本協同教育学会（JASCE）第4回大会報告

日本協同教育学会の第4回大会は、静岡市の常葉学園大学・静岡キャンパスを会場として8月4日・5日の2日間にわたって開催されました（実行委員長・鈴木克義常葉学園短大教授）。台風5号の影響による暖気とフェーン現象のために、蒸し暑い天候の中でしたが、全国各地から70名を超える参加者があり、研究発表やフォーラム、ワークショップなどで活発な意見交換、研鑽が行われました。

フォーラムや研究発表では、小学校高学年での協同学習の手法を用いた英語教育、高校生の古典読解、大学生の探究的な取り組みによるエイズ教育、看護学教育など、幅広い年齢段階・対象領域での協同教育の実践例が紹介されました。また、今年度の大会基調講演は、『先生のためのアイデアブック』（ナカニシヤ出版）でおなじみのジョージ・ジェイコブズ先生（国際協同教育学会理事）がシンガポールから招かれ、教育理論や第二言語習得理論との関わりから、言語教育における協同学習の有効性について詳しい解説が行われました。

すでに予告されていると思いますが、来年度の第5回大会は、国際協同教育学会創立30周年記念大会との共催で、6月5日から3日間、中京大学八事キャンパスで開かれることが決まっています。世界各国から協同教育に携わる数多くの実践者・研究者が集い、熱い情報交換の場になるものと思います。この機会を楽しみにお待ちしておりますとともに、是非こんな企画を実現してほしいというようなご要望がありましたら、事務局までご連絡下さい。本会と日本協同教育学会との橋渡しをさせていただきます。（事務局記）

平成19年度 野田市学力向上拠点形成事業成果発表会

1. 日時 平成19年11月28日（水）
2. 時程

11:20～ 12:05	45 (50)	公開授業参観(みずき小、南部小、山崎小、南部中)
14:00～ 14:35	35	南部地区4校成果発表 1みずき小 2南部小 3山崎小 4南部中
14:45～ 16:05	80	シンポジウム 望月和三郎氏、荒木正志氏、山本良和氏 南部地区小中学校研究主任4名 コーディネーター杉江修治氏

3. 全体発表会会場 野田市立南部中学校
4. 問い合わせ 野田市学力向上推進協議会事務局 ()

中京大学・南山大学でのジョンソン兄弟来日講演

9月12日、3時から4時半まで中京大学で、6時から8時まで南山大学で、ジョンソン兄弟の講演が開かれました。前者はウイークデーの日中にもかかわらず、45人、後者は100人を越える参加者が集まり、盛況でした。当初中京大学では兄のロジャー氏が、南山では弟のデイヴィッド氏が講演の予定でしたが、どちらも二人の息の合った掛け合いで講演が進められました。参加者によるグループ学習も交え、ジョンソンらの開発した協同学習の基本的な枠組みを分かりやすく解説してくれました。参加者の協同を基礎に置いた講演は、雰囲気も和気藹々として、なお意欲を全員が維持できる、文字通りの協同体験であったように思います。



全国個集研愛媛大会

2007年度大会は2007年11月23、24日に愛媛県で開催されます。

詳しくは個集研 HP (<http://ww6.enjoy.ne.jp/~juntendo4649/>) をチェックしてください。問い合わせは「愛媛集団学習研究協議会」

日本協同教育学会 協同学習ワークショップの予定

参加・申し込みは日本協同教育学会 HP (<http://www.jasce.jp/>) をご覧ください

10月20/21日	認定ワークショップ(Basic)	南山大学
11月3日	半日入門ワークショップ(高校・大学教員向け)	京都橘大学
11月4日	半日入門ワークショップ(小・中・高校教員向け)	日星高校 (舞鶴市)
12月22/23日	認定ワークショップ(Advance)	名城大学

学び合い、高め合い、励まし合い、認め合う教育の追求

全国協同学習研究会会報 2007年度 3号

発行日：2007年12月20日

事務局：

2007年度 全国協同学習研究会研修会の ご案内

2007年度の全国協同学習研究会の研修会のご案内です。

先にもご連絡したように、今年度は事情により大会開催の形をとるに至りませんでした。それに準じた形で、実践公開を伴う研修会を開催いたします。研究大会と同様、どうぞ積極的にご参加ください。

日時 2008年2月8日

会場 名張市立つつじが丘小学校

テーマ

仲間と学び合う中で、ともに高まる子をめざして

～「話す・聞く」「書く」活動を通して～

プログラム

授業公開

分科会による授業検討会

講演： 学び合う子ども、高め合う教師

有本高尉氏（犬山市立楽田小学校校長）

なお、案内を同封いたします。

研究的実践

久留米大学文学部・日本協同教育学会会長 安永 悟

「研究的実践」は協同研会長でいらっしゃる杉江修治先生（中京大学）から、一年半ほど前にお聞きしたことばです。先生が現場での実践指導を通して編み出されたことばと理解しています。

その時、詳しい説明があったわけではありませんが、研究的実践ということばが意味する内容とその重要性は、直感的に理解できました。むしろ、わたしの勝手な理解でしたが、「授業改善において研究者の思考パターンと研究方法が強力な武器になる。これを組み込んだ授業実践が必要である」と解釈しました。これは、わたし自身が研修会や授業のなかで常日頃強調していたことであり、研究的実践ということばはその内容を端的に表していると思えました。「研究的実践」ということばの響きも心地よく、その後しばしば使わせていただいています。

しかし、公的な場面での言及が増えるにつれ、研究的実践についてまとめる必要性を感じていました。まだ不十分ですが、現段階における思いを書き留めておきたいという気持ちから、本稿をまとめてみることにしました。皆さまのご意見をいただければと思っています。

*

1. 杉江先生の定義

研究的実践に関する杉江先生の定義を知りたくて、文献の紹介をお願いしたことがあります。その時のお返事は「どこかの新聞に書いた記憶がある」ということでした。残念ながら、その新聞記事は確認できていません。

そこで今回、本稿をまとめるにあたり、再度、研究的実践に込められた杉江先生の意図をお尋ねしました。その結果、次の回答をえました。

「研究的実践の私のイメージは、アクションリサーチを現場自身で行うということですね。仮説、検証型の実践を積み重ね、水準はさまざまでしょうが、そこから一般原理を導き出し、実践に応用していくというものです。単元見直し学習などは研究的実践の成果だといえると思います」（私信、2007年12月2日）

杉江先生は研究的実践を「アクションリサーチを現場自身で行うということ」と定義しています。その具体的活動として、「仮説、検証型の実践を積み重ね」、水準はともかくとして、「そこから一般原理を導き出し、実践に応用していく」とことと捉えられています。当然のことですが、研究的実践の主体者は教育現場の第一線で日々授業に取り組んでいる実践者の皆さんです。

この回答内容は、幸いなことに、わたしの理解とほぼ同じと判断できます。研究的実践に関して、大枠としての認識を共有できていることが確認できましたので、これを前提として研究的実践についてまとめてみたいと思います。

2. 研究的実践の意義

経験に頼っているだけでは、授業改善は遅々として進みません。

確かに経験は大きな意味をもちます。日々繰り返す授業の場こそが、授業改善の出発点であり、帰着点です。授業実践の場で繰り広げられるさまざまな出来事を、教師は一人の当事者として体験し、そこから拾い出した経験知を授業に応用します。その効果は決して侮ることはできません。

しかし、経験知には横の広がりとはもかく、多くの場合、縦の積み重ねを期待できません。実践者同士で経験知を交換しあい、共感しあうことはできても、そこから学習者の変化・成長を引き出すために有効な、新しい何かが創り出されることは希です。つまり、個々の経験知を貫く一般原理を導き出し、それを実践に応用する、という活動にはなかなか発展しません。

ここに研究的実践を推奨する意味があります。日々の実践でえられた経験知を、経験知の世界に留めるのではなく、研究者の思考パターンや研究方法を援用しながら、一般原理に高めることが求められます。一般原理は授業改善の指針となり、授業実践を通してさらに鍛えられます。このようにして一般原理と実践との間に望ましい循環が生まれます。この循環を研究的実践のサイクル(図1)と呼ぶことができます。

とくに、実践を通して鍛えられた一般原理は、過去に体験したこともない、まったく新しい出来事に遭遇しても、その時点でもっとも相応しいと思われる具体的な対処法を導き出すことができます。積み重ねのない経験知のみに頼っているのは、新たな試行錯誤からはじめるしか対処法はありません。

3. 研究的実践のサイクル

研究的実践は、研究という手法を用いて実践を展開する、という意味です。研究が手段であり、実践が目的です。ここでは手段としての研究方法の観点から研究的実践について述べます。

図1をご覧ください。研究者が慣れ親しんでいる一般的な研究方法を参考に、研究的実践の流れを図示したものです。教師は日々の実践のなかでさまざまな問題に直面します。その「問題」を的確に把握し、その解決や改善に寄与すると思われる対処法と、その効果についての見通しを立てます。この見通しが「仮説」です。仮説を検討するために最適な「計画」が練られ、計画にしたがって「実践」を展開します。その際、仮説の妥当性を検討するために必要なデータを収集します。えられた客観的なデータを分析し、仮説や計画、実践法の妥当性を「評価」します。その評価に基づき、当初の問題が解決または改善され

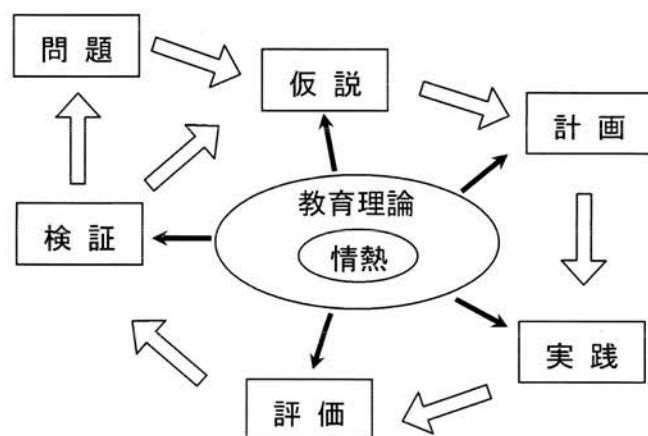


図 1. 研究的実践のサイクルと原動力

たかを「検証」します。期待された成果がえられていなければ、再度、仮説を練り直し、新たに計画・実践・評価・検証のサイクルを展開していきます。そのなかで新たな問題が明らかになることもあります。この新たな問題に対しても研究的実践のサイクルで同様に対処します。授業に完成形はないといわれます。研究的実践を続けている限り、図1のサイクルが止まることはありません。

4. 研究的実践を支える理論

研究的実践のサイクルを理解できたとしても、このサイクルを動かすエンジンが必要となります。それが研究的実践を支える授業観であり、学習観であり、教育観です。一言でいえば実践者のもつ教育理論です。

どのような教育理論に基づいて研究的実践のサイクルを動かすかは、実践者の判断にゆだねられます。どれが良いか、悪いかはありません。採用された理論により、問題の捉え方も、問題解決の見通しも、対処計画や授業内容も変わります。それに応じて評価の視点も異なります。

ただし、理論の善し悪しは、その理論に依拠した実践によって学習者の変化・成長がどれほど期待され、実際どれほど実現できたかによって判断されるべきです。学習者の変化・成長をより多く導き出す理論を採用することが、効果的かつ効率的な授業改善を達成できる鍵となります。

教育理論を前面に出すと、明確な教育理論がなければ研究的実践はできないのか、という疑問が生まれます。必ずしも、最初から明確な教育理論が必要ではありません。しかし、授業を計画し、実践する際に、自分自身が依拠した考え方を意識する必要があります。教育理論とは言えないにしても、実践者は自分なりの信念にしたがって授業を組み立て、実践しています。それを素朴な教育理論と呼ぶこともできます。最初は、自分自身の素朴な教育理論に基づき、研究的実践のサイクルを回しはじめ、研究的実践を積み重ねるなかで、

より専門的な教育理論を援用するといったステップアップが一般的だと思います。杉江先生の定義のなかにも「水準はさまざまでしょうが」と述べられていましたが、この点を意識したものと考えられます。

むしろ実証的に検討された理論を活用できるのであれば、それを最初から利用することが最善です。できれば、準拠枠として何らかの教育理論を意図的に学ぶことをお勧めします。それらの理論は人の変化・成長を演出するために明確な指針と具体的な方法を示唆してくれます。教育理論をうまく実践に応用できると、多くの場合、学習者の変化・成長を実感できます。そうすると実践者の動機づけも高まり、研究的実践のサイクルは勢いを増して回転し始めます。

わたし自身を振り返れば、10年ほど前に出会ったLTD話し合い学習法(安永, 2006)に依拠して研究的実践を始めました。5年ほどの試行錯誤を繰り返した後、協同学習の理論と技法に出会い、研究的実践を大きく前進させることができました。現在は、Johnson & Johnson (2005)の社会的相互依存理論の考え方を強く意識しながら、研究的実践を展開しています。むしろ、わたしの専門である心理学研究の理論や方法論、とくにBandura (1986)の社会的認知理論とSorrentino & Roney (2000)の不確定志向性理論はもっとも重要な準拠理論として外すことはできません。

5. 研究的実践を動かす技術

研究的実践を遂行するために、水準はともかくとして、実践者が教育の理論を意識する必要性を説明しました。しかし、それだけでも研究的実践のサイクルは動きません。このサイクルを動かすためには、図1に示した各段階で必要とされる研究方法や実践方法、つまり研究的実践に必要とされる具体的な技術を獲得する必要があります。研究的実践に求められる技術は、細かくいえば図1の段階ごとリストアップできますが、ここではもっとも大きなくくりとして、対象把握技術と対象変容技術の二つに、簡単に言及しておきます。

対象把握技術は、自分の依拠する教育理論に沿って、対象となるクラスやクラスのメンバーについて、現状を的確に把握する技術です。授業期間の始まる時点と終わった時点の状況把握や、授業期間中の変化過程の把握が対象になります。または、何らかの問題が生じた場合に、その状況を的確に把握する技術も含まれます。

図1の研究的実践のサイクルでは「問題」の段階に直接関与する技術です。加えて、それまでの実践を通してえられた評価結果や検証内容も対象把握の大切な手がかりとなります。したがって、図1の「評価」と「検証」の段階に必要とされる技術も対象把握技術に含まれます。

把握された対象を望ましい方向に変容させる、つまり学習者の変化・成長をもたらすのが対象変容技術です。たとえば、協同学習には多種多様な技法が準備されています。当該対象の状態を考慮した場合、もっとも効果が期待できる技法を採用し、対象を考慮して技法を調整します。ときには複数の技法を組み合わせることもあります。同じ技法を活用し

ようとしても対象によって適用の仕方に工夫が必要となります。そのうえで技法を実践します。図1の「仮説」と「計画」、「実践」の段階に必要な技術が対象変容技術といえます。

研究的実践には多種多様な技術が必要となりますが、対象把握技術と対象変容技術が両輪となって初めて研究的実践のサイクルが動き出すことを忘れないでください。この二つの技術を獲得することは、教育理論の修得と同様、地道な訓練が必要となります。

6. 実践者と研究者を結ぶ研究的実践

杉江先生が研究的実践をアクション=リサーチと捉えられていました。図1に示した研究的実践のサイクルはまさしくアクション=リサーチの段階と一致しています。

ただ、アクション=リサーチの場合、研究室における実験的・理論的研究と現場での実地研究を連結し、相互循環的に推進しながら問題を解決するといった側面も含まれています。この点を重視するのであれば、研究的実践が実践者と研究者を結びつける良いきっかけになると考えています。つまり、日本の教育界においては実践と研究の乖離がしばしば指摘されてきましたが、研究的実践がその乖離を乗り越える契機になると期待しています。

これまでの論考から推察していただけるように、研究的実践は実践者と研究者が協力しあうことで初めて、その本来の効果が期待されます。研究的実践に必要とされる理論は研究者が得意とします。また、対象を評価したり検証する技術、すなわち対象把握技術も、どちらかといえば研究者が得意とします。一方、実践の場に関しては実践者が詳しく、学習者に対する具体的な働きかけ、変化・成長をもたらす技術は実践者が得意とします。したがって、研究的実践の場では実践者と研究者が協力しあうことにより、大きな成果が期待できます。それだけに、研究的実践の場は、実践者と研究者が対等な立場で連携・協働できる数少ない、貴重な場であると考えています。

実際、最近の「教育心理学研究」という専門雑誌には、研究者と実践者が協働して実施した研究的実践が、研究論文として掲載されることが多くなっています。大変望ましい傾向であると思います。

7. おわりに

本拙論を読まれた実践者の皆さまに、研究的実践の難しさを印象づけてしまったかもしれません。研究的実践の必要性を説いている者としてはマイナス効果を与えたような気がします。しかし、研究的実践が難しいのは当たり前です。授業実践を通して学習者の変化・成長を演出する試みです。易しいはずがありません。だからこそ教師という専門職が成り立つと考えています。教育の専門家としての力量を培うためにも、ぜひ研究的実践に挑戦していただきたいものです。

最後に、研究的実践の根底には、学習者一人ひとりの変化・成長を願う、教育者としての情熱が不可欠である(図1)、ということを確認して本稿を終わりたいと思います。

まとまりのない論者になりましたが、本稿が研究的実践に関する問題提起になれば幸いです。そして一人でも多くの実践者と研究者が研究的実践を通して交流を深め、授業改善に向けて共に活動できることを願っています。

引用文献

Bandura, A. (1986). Social foundations of thought and action: A social cognitive theory. New Jersey: Prentice-Hall.

Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (2005). New developments in social interdependence theory. Psychology Monographs, 131, 4, 285-358.

Sorrentino, R. M., & Roney, C. J. R. (2000). The uncertain mind: Individual differences in facing the unknown. London: Erlbaum(UK), Taylor & Francis.

安永悟 (2006). 実践・LTD 話し合い学習法. ナカニシヤ出版

2007 年度 冬の各地の実践研究会

愛知県犬山市楽田小学校

「学び合う子ども、高め合う教師」をテーマに、学校体制で協同を基盤に据えた授業実践づくりを展開。振り返りカードの系統的開発、グループでの協同のモデル構築など、積み重ねられた特色ある実践が見られる。

2008 年 1 月 31 日 (木)

- | | | |
|-----|-------------|---------------------------------|
| 日 程 | 11:35~12:20 | 授業公開Ⅰ
(第4時限:1年生、4年生、6年生各1学級) |
| | 12:20~13:50 | 給食・青空(昼放課) |
| | 13:50~14:35 | 授業公開Ⅱ
(第5時限:2年生、3年生、5年生各1学級) |
| | 14:35~15:10 | 移動・休憩 |
| | 15:10~16:10 | 研究協議 低学年部会・中学年部会・高学年部会 |
| | 16:15~16:30 | 全体交流会 |

指導・助言 犬山市教育委員会客員指導主幹
中京大学教授 杉江 修治 氏

愛知県犬山市立犬山北小学校

無条件に地域に学校を開くことを通して、地域の力を学校に導入。その成果はとりわけ特別支援教育に花開いている。協同の原理の追求が特別支援教育に結実している。その他、多くのユニークな実践が重ねられてきている。

2008 年 2 月 15 日 (水)

平成19年12月20日

各位

名張市立つつじが丘小学校 校長 山本 美一
全国協同学習研究会 会長 杉江 修治

2007年度 公開研究会のご案内

師走の候、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、名張市立つつじが丘小学校では本年度、2007年度学校の教育力向上支援事業の重点支援校並びに平成19・20年度名張市教育委員会指定学校教育研究推進校として、として、研究的実践を推進してまいりました。この度、全国協同研究会の研修会も兼ね、ささやかな実践ではございますが、これまでの取り組みの一端を公開させていただき、皆様方のご指導・ご助言を賜りたく、下記のように公開研究会を開催させていただきます。

つきましては、何かとご多用のこととは存じますが、多数ご来校いただきご指導・ご助言賜りますよう、ご案内申し上げます。

記

【研究テーマ】

仲間と学びあう中で、ともに高まる子をめざして

～「話す・聞く」「書く」活動を通して～

◆ 日 時 平成20年2月8日（金） 13:10～17:00

◆ 会 場 名張市立つつじが丘小学校
[Redacted]

◆ 日 程

13:10 13:40 14:25 14:40 15:10 16:00 17:00

受付	公開授業	移動	全体会 (図書室)	研究協議	講演会 (図書室)
----	------	----	--------------	------	--------------

◆ 講演会

「 学び合う子ども 高め合う教師 」

愛知県犬山市立楽田小学校校長

全国協同学習研究会委員

有 本 高 尉 先生

◆ 公開授業 13:40~14:25

学年組	教科	単元名等	授業者	教室
1年2組	国語		鈴木 佐知	1年2組
2年1組	国語		井戸本 与利子	2年1組
3年3組	国語		岩森 進	3年3組
4年1組	国語		村上 好生	4年1組
5年2組	国語		山本 真里	5年2組
6年4組	国語		垣下 智	6年4組

◆ 申し込み

準備の都合上、下記事項をご記入の上、2月1日（金）までに、FAXまたはE-mailにてお申し込みください。

名張市立つつじが丘小学校公開研究会

参加申込書

学 校 名		電 話 番 号	
-------	--	---------	--

職 名	お 名 前	職 名	お 名 前

読解力をめぐって

石川県能美市立根上中学校 西田 誠一

ご縁があり、昨年11月より6回、杉江修治先生を本校にお招きし、ご指導をいただきました。私にとって、杉江先生をお迎えに行った車中での15分間程の時間が大変貴重なものであり、示唆に富んだ先生のお話から、研究のヒントをたくさんいただきました。

本稿では、研究の経過の中で、杉江先生をはじめ、多くの先生方に教えていただいたことや気づいたことなどを、思いつくままに書かせていただきたいと思います。

「ミクシ？」

平成18年度より2年間、石川県読解力向上推進事業研究校に指定され、PISA型「読解力」をめぐり、学力向上の取り組みを行うことになりました。本校では、研究主題を「読解力を育む指導の研究」、副主題を「学び合える生徒の育成を通して」とし研究を進めてきました。

PISA型「読解力」に深い造詣もない私が、この研究指定を受け、初めて目にした文章は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。」（読解力向上プログラム 平成17年12月 文部科学省）というものでした。

何度読んでも頭に入らず、難解な文章であるという印象を持ちました。この後に続く文章を読んでも、同様の印象を持ち、手繰り寄せる先に何があるのかが、全く読めない状況でのスタートでした。ただ、「効果的に社会に参加するために」の言葉と、「熟考」の言葉だけが、妙に頭に残っていました。

多くの先進校を訪れ、実践の中からヒントを得ようとはしましたが、読解力をどのような力として捉えるか、答えを見出せないままに時間が過ぎていきました。そんな中、『図解フィンランド・メソッド入門（北川達夫/著 フィンランド・メソッド普及会/著 経済界/出版）』という本に出会いました。この著書の中に書かれている、グローバルコミュニケーション力の捉え方や、発想力、論理力、表現力、批判的思考力、コミュニケーション力の考え方の中に、感覚的なものなのですが、「効果的に社会に参加する」「熟考」の形が見えてきたように思えます。また、カルタを利用した作業や、ミクシ？（どうして？）の問いかけの中に、「つなげる」、「根拠」など、ヒントとなるイメージを持つことができました。

「読解力・考」

私の中でおぼろげながら見えてきた読解力は、「考えること」と「伝えること」の言葉の中に見えかくれする力でした。この力を育むねらいは、全教科で共有できるものであるこ

とや、テキストの内容や質の違う教科の特性を生かし、教科を連携する中で達成できるものであることを予感していました。

しかしながら、まだ、ぼやけた総論が見えてきたに過ぎず、研究の核となる考え方が捉えきれない状況の中、京都市立高倉小学校と御池中学校へ、視察に行きました。両校とも、フィンランドの教科書を利用し、読解の授業を行っている先進校です。授業を参観させていただいた後の懇談では、大変貴重なお話を伺うことができました。

この視察を通して気づかせていただいたことは、授業における原則論に立ち返るということでした。すなわち、授業を通して生徒にどのような力をつけたいのか、という視点に戻ることでした。乱暴な言い方ですが、主と従を取り違えていたことに気が付きました。

「確かな学力」

もう一度、学習指導要領に立ち戻り、確かな学力を育むことを研究の中心に据え、「考えること」「つなぐこと」の言葉の中に、読解力を探ることにしました。

高倉小学校、御池中学校では、9年間を見通して教科指導に当たっていますが、この中にも、ヒントを得ることができました。

中学校教員が小学校に出向き授業を行っていましたが、これは中学校における教科担任制の良さを生かすことです。専門性を生かし、小学生がわくわくするような仕掛けを授業の中に仕組むことができるでしょう。一方で、学級担任がすべての教科を教える小学校では、教師が教科間のつながりを意識した授業を行うことができます。算数で学んだグラフの見方を社会の時間に取り上げるなどの仕掛けを作ることができるでしょう。このような状況を作り出す工夫が必要であると感じました。

また、両校ともに読解の時間を設定し、フィンランドの教科書を用いた授業が行われていました。高倉小学校では、教科書にある「断水」のテキストを用いた2年生の授業を拝見させていただきました。小学生らしい発想や論理、しっかりと言葉で表現し発表している様子や、意見交換を通じて評価し合う姿を目の当たりにし、フィンランド・メソッドに示された5つの力についての理解が深まっていったように感じました。

今後は教科に利用できる課題を設定し読解の授業を進めていく、と話されていた研究主任の言葉に、自校の研究の方向を確認することができました。

「読解力・再考」

この時、私の頭にはひとつのイメージが出来上がっていました。確かな学力が中心にあり、それぞれの教科で求める力とつながっています。その教科でねらいとする力や、教科の学びを支える力として、また、教科で求める力に組み込まれて働く力として、読解力と呼ばれる力が見えていました。

確かな学力を中心に据えたことで、PISA型「読解力」の定義にある「効果的に社会に参加する」力である読解力の視点は、生きる力の考え方に生かされるものと解釈すること

ができました。

また、読解力、本体の捉え方には、教科共通や教科連携の視点が必要であると感じていましたが、私の中では、鍵となる言葉は既に決まっていました。それは「考える」でした。この言葉を取り巻いて、研究の内容や方法が決まってくるように思っていました。

フィンランド・メソッドをヒントにしなが、読解力を分析的に発想力、論理力、表現力、評価力、コミュニケーション力とし、PISA型「読解力」にある「熟考」を含む力として定義することにしました。

後の研究発表大会において、理解力はどこに示されるとの質問がありましたが、それぞれの段階の中に理解力の程度が示されていると考えています。

「教科書」

京都の両校のようにフィンランド教科書を用いた読解の授業を、自校において行うことは、現状では考えられませんでした。各教科の授業の中で、読解力を育む仕掛けを考えなければなりません。つきたい力と読解力に視点を当てながら、教科書を見直すことから始めなければいけないと感じていました。教科特有の考え方の良さを知っているのは、教師自身です。専門職として、普段から指導が難しいと感じるところや、もう少し深められたらと感じている内容の中にこそ、その糸口があると考えました。

教師がどれだけ課題の本質を理解しているか、その上でどのように料理し、見通しを持って提示するか。課題設定の工夫を、研究の1つの柱としました。

「参加・協同・成就」

杉江先生からは、いつも元気をいただきました。本質を突く厳しいお話の中に、気づかされ、励まされました。

「ねらった力について、授業を評価しなければいけない。ねらいを後付けしてはいけない。」「教師のセレモニーの中に、生徒をとりこぼして授業を進めていないか。」「どの生徒にも、分りたい、学びたいという思いがある。」「できないだろうと最初から思っていないだろうか。そのための工夫を考えているか。」「集団として達成を目指す学習目標はあるだろうか。」「生徒と生徒、生徒と教師、教師と教師、また、保護者との関係において協同が成り立っているだろうか。」など、先生のお考えは、「参加・協同・成就」の言葉の中に集約されているように感じます。

ねらいを分析し課題を工夫しても、実際の授業は、机上の理論だけでは進みません。杉江先生からご指導いただいた協同学習の中に、今まで見えてこなかった生徒の姿を、やっと捉えることができるようになりました。

自分の考えを持つことを大切にしながら、みんなで学び合い、高め合う中で、学びが深まっていくのではないかと考えました。そのための工夫を、研究のもう1つの柱としました。

「本質」

改めて振り返ってみると、研究を通して得たことは、読解力という言葉をめぐる、教材観、指導観、生徒観などについて、もう一度自分自身の授業を見直すことであったと思います。

杉江先生が、授業整理会や研究協議会、また、車の中でよく口にされた言葉は「本質」でした。先生は本質とは何かを、大きな課題として投げかけられていられました。本質をどう理解し、どのように生かしていくのか。このことを心に据えて、これらの研究を進めていきたいと考えています。

最後になりましたが、杉江先生をはじめ、ご指導をいただきました多くの先生方に、心より感謝いたします。

「連句」における協同性

石田裕久（南山大学）

気のおけない仲間と時折集まっては「連句」遊びをするようになって、十年ちょっとになります。連句というのは、複数の人が和歌の上句（五七五）と下句（七七）をつないでいく伝統的詩型で、いくつつないでもいいわけですが、三六句続けたものを歌仙といいます。連句（連歌）の起源は古く、神話時代にまでさかのぼっての諸説があり、みなさんよくご存じの俳句はこの連句の発句（第一句）が独立したもののなのです。

西欧や近代日本の文芸は、そのほとんどが個性と独創性を至上のものとし、他者との競争を積極的価値として認め、攻撃性に自我の発展の契機を見ようとするもので、「個人の秘密の時間と場所において、秘密の祈禱にも似たやり方（大岡信）」で作品を紡ぎます。こうしたことから、連句のような共同制作による文芸は世界にも類例を見ない形式だと言われています。

私は最近になって、この連句のあり方のうちに協同の精神とでも呼びうるものが深く関わっているのではないかと、ということに気づくようになりました。ここでは思いつくままに、連句と協同の精神との共通性を挙げてみることにしましょう。

①「今ここ」での関わり 連句は「座の文芸」と言われるように、同じ場所、同じ時間という条件が一義的に重要です。台本のないアドリブ劇と同じで、衆目の中で臨機応変に演じることが求められますが、これは協同学習で時間と場所を共有した対面しての活発な相互交流が重視されるのとよく似ています。

②参加の平等性 連衆（連句に集う仲間をこう呼びます）は封建社会の肩書はずして雅号によって交わります。協同学習でも、参加の平等性が必ず確保されるよう求められます。

③個人の責任性 協同学習では、グループ目標の達成と、それに対する個人の責任が明確

になっていることが必須とされていますが、連句の場合も、「一人一人がその個性をふりしほりつつ、しかも全体の運びに徹底的に尽くさねば」なりません。

④ふり返りの機会がある 協同学習では、活動に対するふり返りの機会を必ずもつようにしていますが、連句でも「一人一人が自作をも含めて全員の作品を柔軟に鑑賞する力を養い、時には他の参加者の作品に干渉して修正することさえも辞さないほど」の相互評価、振り返りが行われています。

⑤互恵的相互関係 学びは社会的な営みであって、自らの学びが仲間の役に立つ、そして、仲間の学びが自分の役に立つという自他共栄のこころを育むことが大切です。連句でも「オレが、オレが」と、自分だけが目立つ句を作ろうと自己主張ばかりしては、全体としていい歌仙にはなりません。

このようにしてみると、グループでよりよい成果を生み出そうとするときに働く原理は領域を問わない、ということを示しているのかも知れません。

丸山正克さんの新刊

協同研 HP でいつもお世話になっている協同研常任委員丸山さんが新刊を出されました。


『知ったかぶりペルーレポート』 一粒社刊 1239 円+税

著者より：ペルーでホームステイをした時の実体験と見聞をまとめたものです。

私が、直接取材したものです。

子どもたちを外国に連れて行き、ホームステイさせます。その時、「当たって砕けろ」と要求しますが、その子どもたちの大変さを実感しました。

事務局からお願い：e-mail アドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内を e-mail で送ってもかまわないという会員の方々は、空メールで結構ですので事務局宛 、アドレスをお教えてください。経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。

事務局からのお願い

会員の方々には会費納入よろしくお願いします。

1 年分 2000 円です。昨年度未納の方は 4000 円の納入をお願いいたします。

郵便振替 口座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589

口座名称：全国協同学習研究会

学び合い、高め合い、励まし合い、認め合う教育の追求

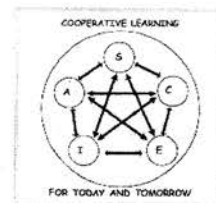
全国協同学習研究会会報 2007年度 4号

発行日：2007年3月20日

事務局：

国際協同教育学会 (IASCE) 30周年記念大会 日本協同教育学会 (JASCE) 第5回大会 同時開催のご案内

2008年6月6~8日に、
中京大学 (八事校舎) で。



設立 30 周年を迎える国際協同教育学会の大会を日本で開催します。2004 年にシンガポールで開催されて以来、2 回目のアジアでの大会です。

発表申し込みはすでに終了していますが、参加は随時受け付けています。日本協同教育学会ホームページ (<http://jasce.jp/>) から申し込んでください。

プログラムなどは順次ホームページに掲載されていきます。ご覧ください。

また、同時に日本協同教育学会第 5 回大会も開催します。

こちらすでに発表申し込みは終了しています。ただ、参加申し込みは随時可能ですので、これも学会 HP から申し込んでください。

こちらの大会では、実証的な研究のほか、初等、中等、高等の各教育現場の実践研究も多数発表申し込みがありました。北海道教育大学の鹿内信善氏による国語の新しい授業の進め方についてのワークショップや、小学校英語をめぐるパネルトークなどもあります。プログラムや発表の要約など、学会 HP に順次掲載されていきますので、ぜひご覧ください。

興味深い交流ができる機会です。ぜひご参加ください。

名張市立つつじが丘小学校での協同学習研究会研修会報告

2008年2月8日、先にご案内した協同学習研究会の研修会を名張市立つつじが丘小学校で開催しました。

テーマは「仲間と学び合う中で、ともに高まる子をめざしてー『話す・聞く』『書く』活動を通して」で、2年計画の初年度の中間発表も兼ねたものでした。

各学年1学級ずつの公開は、予め、年末から学年教師集団で練り上げた内容であり(1月12日には大多数の先生が名張から中京大学に集まり、指導案を練り上げる会をもったほどです)、つつじが丘小としての特色を出し始めている、良い実践が並びました。指導案検討の過程で、PISAの読解力への認識が深まり、達成すべき学力観の広がりもある実りの大きい研究のステップであったようです。

全国協同学習研究会からの参加も得て、低学年・中学年・高学年の分科会も活気を持って進められました。

つつじが丘小では、「参加」「協同」「成就」の3つの要件を授業設計にきちんと組み込む努力がなされています。単元見直しを含む、学習課題・学習手順の明確化、協同的な学び合いの機会の設定、学習後の振り返りなど、有効な工夫が学校の文化として定着しつつあるようです。

最後に犬山市立楽田小学校校長の有本高尉氏の講演があり、学び合いの授業に加えて、高め合う教師集団づくりの重要性を強調されていました。

来年度、2年間の研究成果を問う発表会があるはずで、情報がわかり次第ご案内いたします。

なお、この日、つつじが丘小学校校長の山本美一氏の著書も刊行されました。校長の経営力が問われている今日では、重要な事例を学ぶことができる本です。

山本美一著 『校長学—教師の育ちを促す学校経営』 一粒社 1,143円+税
少部数出版のため、ご注文は一粒社へ直接お願いします。

事務局からのお願い

会員の方には会費納入よろしくお願いします。

1年分2000円です。昨年度未納の方は4000円の納入をお願いいたします。

郵便振替 口座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589

口座名称：全国協同学習研究会

犬山市立楽田小学校学校公開研究会報告

2008年1月31日、犬山市立楽田（がくでん）小学校で公開研究会が開かれました。

テーマは「わかる喜び、考える大切さを感じ、共に学ぶ城山っ子の育成—学び合う子ども、高め合う教師を目指して」でした。学校が楽田城の跡に立てられていることから子どもたちは城山っ子と呼ばれています。

2001年度の犬山市の教育改革の開始以来、一貫して、協同学習の原理を元に、子どもの学びの追求をしてきた、足が地に着いた実践を積み重ねてきた学校です。

各学年1学級の授業公開の後、分科会、全体会がもたれました。

楽田小学校の特色のひとつは、少人数担当の教師も含む学年の教師集団による協力体制です。「高め合う教師」という、教師の協同の意義と手ごたえをしっかりと感じ取った実践が貫かれています。

また、犬山のほかの学校にも普及させたアイデア開発がなされています。今は多くの市内の学校で、普通に行われている授業直後の形成的自己評価としての振り返りを行う「あゆみカード」の徹底した開発は注目すべきものがあります。振り返り項目の整理は、同時に指導目標の整理であり、それを子どもに渡すのですから、子どもにとって分かるように表現された、学習目標のリストにもなるものです。これを毎年改定する作業が重ねられています。今年度はその内容を1冊にまとめたものが出されました（この会報の後で紹介）。

もう一つは、これもすこしずつ市内に広がりつつある学び合いの手法で、楽田小では「リレー方式」と名づけている方法です。一つの課題に取り組むための手順を、教師が4つのステップに分割し、4人グループのメンバー全員が各ステップを担当し、順に協力し合いながら取り組むという手続きです。この方法を用いると、子どもたちが全員頭を寄せ合い、グループとしていかにがんばれるかという意気込みで、学力差を越えた認め合いの中での協同がなされていきます。犬山市内外から多数の参加者を得て、盛会でした。

なお、楽田小学校の実践が本になりました。

犬山市立楽田小学校著 学び合う子ども 高め合う教師—公教育のあるべき姿を求めて 教育新聞社 2000円

「自ら学ぶ力」を育成するためには、これまでの教え込む授業から脱皮し、子どもが主体となって活動する授業にしていかなければなりません……

教師がたがいに高め合いながら実践する教育現場で、学び合う子どもを育成するために、研究テーマを「学び合う子ども・高め合う教師」とし、育てたい子ども像と望ましい教師像とを教育活動を推進する両輪として研究を継続してきました……「まえがき」より

*書店にご注文ください

犬山市立犬山北小学校学校公開研究会報告

2008年2月15日、犬山市立犬山北小学校で研究会が催されました。この学校では基本テーマ「共に学び、共に育つ学校づくり」に一貫して取り組み、「自らの学びを創造する学び合いの授業」を今回の研究会のテーマとしました。

とりわけ、これまでの3年間には、アイデアに満ちた興味深い実践を重ねてきた学校です。朝から終業まで、いつでも毎日学校公開（したがって、この日も参観可能な授業は1時間目からになります）、月曜日から木曜日までの掃除の廃止（昼休み時間を倍増させる）、校長室の開放（休み時間には子どもがたくさん出入りしています）等など、まだまだいくつも数え上げることができる改善、改革がなされました。

何よりの特徴は、地域と学校を結ぶ試みにあると思われます。PTAの参加の広がりや深まりに留まらず、特別支援教育の充実を図って、地元のNPOと幅広く連携した特別支援教育の充実は、他に類を見ない展開をしてきています。

徹底した学校開放の方針通り、全教室での授業公開がなされました。すべて児童相互の学び合いを念頭に置いた実践となっています。

午後は、教育評論家として著名な尾木直樹氏を招いての講演がありました。さらに、学校、地域、保護者、学生支援者、マスコミなど、犬山北小学校にかかわりを持つすべての層と、そこに児童代表を加えたパネルディスカッションももたれました。

子どもの育つ環境づくりに、コミュニティとのパートナーシップを広げ、深めようとしてきた犬山北小学校の試みは貴重なものといえるでしょう。

なお、犬山北小学校もその実践を出版しました。

犬山市立犬山北小学校著 学びの学校づくり—犬山北小学校の改革への挑戦

小学館 1700円＋税

第1章 学校改革「共に学び、共に育つ」

学校改革の基本理念

全国学力テスト不参加校として思うこと

学び合いの授業の本音とは

「開かれた学校づくり」とは

子どもの夢を実現させるとは

学校は自立できるか

第2章 学び合い、育ち合いの授業に取り組んで

第3章 独自の支援システムによる挑戦—すべての子どもたちのための特別支援教育

章立て（一部）の紹介

犬山市授業研究会の紹介

犬山市では、市内有志の教師が集まり、月に一度の研究交流を図っています。今年で7回目になります。

2007年度は、定例の会以外に、12月25日に楽田小学校の千田初子氏の授業をDVDを見ながら解説を受け、それを材料としての意見交流、学習会を持ちました。研究会のメンバーは約30名ですが、この日は仲間と連れ立って70名を超える参加人数となりました。優れた実践をその実践者から学ぶ貴重な機会として好評でした。

この3月25日には、また犬山市福祉会館で同様の授業研究会を催します。この案内では直前すぎるかもしれませんが、参加希望の方は犬山市教委水谷指導主事にご連絡ください。さらに、2008年度にも3回ほど同様の研究会が企画されています。

協同教育実践資料（4～6）3冊刊行

石川県能美市立根上中学校著

読解力を育む指導の研究—学び合える生徒の育成を通して

米子市立加茂中学校著

未来につながる確かな学力と豊かな人間性の育成—生徒自らが主体的に活動し、思いを語り、受け入れられる集団づくり

犬山市立楽田小学校著

学び合う子ども・高め合う教師—算数科「あゆみカード」集

各冊2500円 少部数出版のため、ご注文は一粒社へ直接お願いします。

また、ネット環境が整い次第、協同教育学会HPにPDFの形で掲載して行きます。

事務局からお願い：e-mail アドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内をe-mailで送ってもかまわないという会員の方々は、空メールで結構ですので事務局宛 XXXXXXXXXX アドレスをお教えてください。経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。

全国協同学習研究会2007年度会務報告

1 2007 年度事業報告

- 協同学習法ワークショップ(中級)開催 (2006年3月11・12日 南山大学)
- 会報の発行 (1号:6月15日、2号:9月25日、3号:12月20日、4号:3月20日)
- 全国協同学習研究会研修会開催 (2008年2月8日) 於、名張市つつじが丘小学校
- 2007 年度役員会: 年度内開催予定

2 2007 年度会計 (中間) 報告 (2008 年 1 月末現在)

<収入の部>		<支出の部>	
前年度繰り越し	329436	事務局消耗品	5744
会費収入	84000	郵送料	31870
利子	198	大会開催援助費・振込手数料	0
収入合計	37614	413634	支出合計
現在残高		376020	

3 役員について

○役員 (顧問) の退任について

後藤 東一氏

○2008 年度の役員体制

役職	氏名	所属	氏名	所属
会長	杉江 修治	中京大学		
常任委員	石田 裕久	(事務局長) 南山大学	伊藤 篤	神戸大学
	望月和三郎	東京都研究会事務局長	久保田 滋	芦屋大学
	丸山 正克	豊川市	小島 幸彦	中津川市
委員	霜 和実	春日井高森台小学校	加地 健	犬山犬山北小学校
	市川 千秋	皇學館大学	石田勢津子	名古屋外国語大学
	鹿内 信善	北海道教育大学	小石 寛文	神戸学院大学

	宇田 光	南山大学	関田 一彦	創価大学
	安永 悟	久留米大学	荒木 正志	練馬第三小学校
	塙水尾祐文	青梅市立泉中学校	田川 正樹	春日井西尾小学校
	今飯田 寛	春日井不二小学校	楓 正敏	中津川坂下中学校
	加藤 一哉	恵那市立北小学校	有本 高尉	犬山楽田小学校
	大関 健道	野田市教育委員会		
顧問	梶田 正巳	中部大学	前田 義夫	明石
	永井 辰夫	姫路	新田 正彦	広島
	荻原 克巳	春日井	池田 洋	尼崎
	西村 精爾	春日井	稲垣 菊夫	春日井
	今尾 啓一	春日井	松本 重雄	春日井
	岩田 鎮人	春日井	加藤 孝史	春日井
	阿部 吉一	春日井	有元 佐興	東京
	木村 幸夫	東京	越智 昭孝	広島
	林 典照	名古屋工業高校	長谷川貢一	阿佐ヶ谷中学
	寺井 正輝	春日井	堀場 正美	春日井
	長縄 秀孝	春日井		

4 2008 年度事業計画

- 会報の発行（年間 4 回）：会員の交流と協同学習情報の提供を図る
- 第 39 回全国大会の開催
- 2008 年度役員会の開催
- 協同学習ワークショップの開催
- 国際協同教育学会（IASCE）への参加

5 2008 年度予算方針

- 会報の発行とそれに関わる郵送料。なお、e-mail が可能な会員にはメールによる配信をもって経費節減を図る
- 大会開催校への 10 万円の補助金支出
- 国際協同教育学会（IASCE）への助成（10 万円）
- 年度会費徴収への努力

日本協同教育学会第5回大会

期日: 2008年6月7日~8日

場所: 中京大学

国際協同教育学会が設立されて、まもなく30周年を迎えようとしています。これを記念して、本年6月に開催される第5回全国大会と併せ、国際大会を開催する運びとなりました。大会では例年、協同教育について様々な研究発表やワークショップが行われていますが、今年は特に次のような内容を予定しています。

- ・外国著名研究者の講演
- ・初等教育から高等教育にいたる協同学習の試み
- ・実証的、実践的諸研究の発表
- ・テーマを分けての小グループでの意見交流
- ・協同学習の進め方に関するワークショップ

ぜひ多くの方々に参加いただきたいと考えております。

参加費について(当日)

参加ご希望の方は、4月30日までに下記リンク先のフォームよりお申し込みください。

	大会参加費	懇親会費
会員	5,000円	5,000円
非会員	6,000円	6,000円

なお、3月31日までにお支払いいただいた方は、早割り特典として大会参加費・懇親会費をそれぞれ500円割引させていただきます。

国際学会のご案内と参加フォームは、別に学会HPに掲載されています。